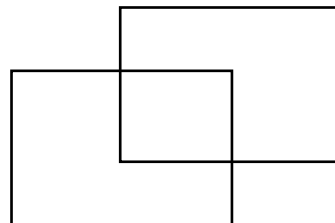


カネタタキ

相地 満



チンチンチン。

わが家の庭のカネタタキ。一年ぶりに鳴きだした。8月の始め。

翌日、国道一号線の交差点でも鳴く音をきいた。

実に、かそけく。チンチンチンチン。

不思議。騒音の中でも、画然として。

小さな小さな音ではあるが、その音を、闇雲に消しさることはできない。

なにかが存在している。

命。その重みを、打ち消すことなく物語る。チンチンチン。チンチンチン。

かすかではあるが、微妙な音の連鎖がはじまった。

8月31日・月曜日

激しい猛暑の続いた夏の終わり。一気に人が動き出した。閑散としていた病院に、再び人が押し寄せた。これまでに声を潜めた人々が、鎮まりかえっていた人々が、こらえきれなくて通院。人数を限定しながら回されていくその現場。さまざまな傷が、病が癒されていく。路上に目立ちはじめた病葉（わくらば）が、一葉、一葉と枯れ落ちている。溝の隅に集まっている。チンチンチン。いまだ灼熱の夏。いづこからか聞こえる音。

9月1日・火曜日

いきなりの驟雨。白いが厚い、雲に覆われた空から雨滴が落ちる。ときに小雨、ときに霧雨。乾いた落ち葉をやさしく濡らす。チンチンチン。秋が来ている。始まっている。ものみな静まり、動いている。古い日傘は、一途に変わる。雨傘に。多色。ランタナの花は、鉛色、いつの間にか黒光りする実をたわわにつける。風が灼熱の夏をはらう。どうにもできない季節の動き。ときのあらわれ。立ちつくす。明日をやさしく、なぐさめる。

チンチンチン。カネタタキが鳴いている。

野も街も、鳴く虫の音に包まれる。

めっきり減ったその数。すっかり遠ざかった風情、虫しぐれ。

なおも目立たずチンチンチン。カネタタキが鳴いている。

こぼれ話・1 鉦叩き

鉦とは仏具の一種で、二本の肉厚ゴングのこと。その鉦を撞木（しゅもく）と呼ばれる突棒で叩いて経文を唱え、金品をもらい歩くことを職業にした人たちがいた。「鉦叩き」あるいは「かねたたき坊主」と呼ばれている。歴史は中世にさかのぼる。身分制度のもとで低位な賤民とされていたが、移動の自由を与えられ、そのため、各地を遊行した。近年にまでおよぶ遊行僧とはまた別の存在で、近世社会の崩壊とともに姿を消した。しかしその末裔や農繁期以外の生業として鉦叩きに出る農民がごく、わずかにいた。鉦叩きの習俗を詳しく記録し、収録したものがないため実態が定かではない。鉦や撞木は民具として残されている。直翅類昆虫カネタタキの名称の由来が鉦叩きであるかどうかは分からない。

鉦は虫送りなどの民俗行事にも使われ、多目的に利用されている。東南アジア由来のゴングや銅鐸などとの関連も興味深い。日本におけるゴングの系統と民俗の解明は重要な研究課題である。

こぼれ話・2 イソカネタタキ

カネタタキの近縁種にイソカネタタキがいる。カネタタキが平地から山野にかけて生育するのに対してイソカネタタキは、海岸沿いに生息する。渥美半島・伊良湖岬の浜辺でイソカネタタキに出会ったのは10月、タカの渡りがピークを迎えている頃であった。芝地から海浜植物の群落へ移行していく境目にテントを張ってすぐのときであった。長距離運転の直後であったので、少し休もうと横になった。小さな虫がテントの中に飛び込んできた。跳ねるのではなくはいづっている。よく見るとイソカネタタキであった。カネタタキと形態が少し違うが近縁種であることは一目でわかる。カネタタキよりも少し頑丈に見える。テントの中では自由に過ごしてもらおう。私は、よそ事を考えていた。

静まると波の音が聞こえる。この浜の砂は荒いのでザーッという音がころよく響き、歯切れよい。すてきな音響の中で私はまどろんだ。ふと気づくとチンチンチンと音がする。その後、チチチチチーッと流れるように音が続く。「イソカネタタキだ!」と瞬時にわかった。その音はカネタタキよりも大きく、長い。あたりには、一頭だけではない。五〜六頭いて、遠くから、近くからにぎやかに、かつ神妙に、音が伝わってくる。イソカネタタキの饗宴の中に私は侵入していたのだ。それは夜を通して続けられた。やがて空が白みはじめる頃、浜の白波が目立つ。夜明けだ。それとともにタカの群が遠く山並みを越えてやってくる。一群れ、また一群れと。「サシバ!!」真っ先に通過していくのはサシバの群れ。遠くのくもり程度に見えていたものが細かい点の集まりになり、やがて鳥の群れとわかる。黒い影となって次々と頭上を横切っていく。私はテントを出て、海浜植物の端に横たわり、打ち続くタカの渡りの荘厳な雄姿を観察した。種類はどんどん増えて多くなる。

イソカネタタキは夜を徹して、まだ陽の昇る前までさかんに鳴き続けた。陽が昇ってしばらくすると静まる。だが季節が進むと昼間でも鳴いている。明るく開放的な昼間。白亜の岬を観ながら聞くイソカネタタキの音もまた哀愁があっておもしろい。

<採 集>

・ビーティング

左手で傘を持ち、右手で棒状の物を持つ。木の枝先の直下で傘を受けるようにして枝をたたくいろいろなものが傘に落ちてくる。小さい虫などである。そんな中にカネタタキがいる。手ではつかめないのでコップ状のものをかぶせて捕獲する。カネタタキはガラス面に止まることができるので容易に捕まえ、手に入れることができる。

・スウィーピング

捕虫網を横にし、草叢や木の枝の辺りをすくう。捕虫網の口径は大きいほうがよいが、ハリガネなどが引っかかり、網を破損することがある。すくい採った虫はすばやく捕獲し、ケースに入れる。

<飼 育>

ケースや瓶の中で飼う。フラスコの中でもよい。小さく平べったいのでわずかな隙間からでも逃げやすい。鳴く音を楽しむにはオスのみを飼うのがよい。エサはキュウリ・ナスなどの切れ端やメザシ・カツオブシなどを少量入れておく。ゆで卵の黄身もあるとよい。キュウリ・ナスは腐ったり、カビが出やすいのでいつも新鮮にして古いものは入れ替えておく。新鮮なものであれば、水分補給の代用にもなる。オス・メスを飼い、累代飼育するのもよい。その場合は土を入れるが、土のかわりにミズゴケを敷き詰めて湿らせておくのもよい。冬季の乾燥を防ぐことが大切。ところが湿度が高すぎるとほかの物にカビが生えたり、腐ったりしやすくなる。キュウリやナスにつまようじを刺してガラス面に触れないようにしておく。共食いに走るペアもいるので要注意。オス1・メス1程度にしておく。オス・メスは産卵管の有無により見わける。卵を産ませるより、鳴く音を楽しむことのほうが長く親しむことができる。鳴く音も季節により少し変化する。音色やリズムの変化なども味わい深い。

<観 察>

野外でカネタタキの鳴く音が耳に入らないということがある。その場合、音には方向性というものがあり、その方向がそれているということが考えられる。いろいろな角度から聞き取るように心がけるとよい。聴覚には個人差があるということも知っておくとよい。年齢的にも若い方が聞き取りやすいと考えられるが、高齢になってもよく聞き取られる方もいる。また子どもであっても聞き取りにくい子もいる。心因的なものもあるのかもしれない。かつて聞き取れたのに聞き取れなくなった。またその逆の場合もある。さまざまな個人差がありうるので、留意しておきたい。

PHOTO gallery



1. カネタタキ